

「好まれる景観」の景観構造に関する研究

—上越市都市景観デザイン賞に応募された景観を対象として—

正会員 樋口 忠彦*1) 同 岡崎 篤行*2)
同 ○中川 朋子*3)

1. 背景と目的

現代、様々なメディアでは「景観」という言葉がむやみに多用されている。一般的に「景観」というと山などの「景観対象」を想像しがちであるが、本来的には、景観とは人が対象を見ることによって生じる心的現象であるといえる。このように景観を捉えると、人の主観が重要視されるが、一方で主観だけでは、実際の景観計画、景観形成が難しいこともまた事実である。現在、全国的にも景観を重視したまちづくりが注目されており、何らかの具体的な形としてこれからの景観づくり、そしてまちづくりを行っていかなければならない。

今回対象とする上越市では、平成12年10月より景観条例が施行され、今後の具体的な展開が期待されている。本研究では、上越市の都市景観デザイン賞を対象とし、「関係性」という観点から市民に「好まれる景観」を把握し、上越市民に親しまれている景観特性を明らかにすることを目的としている。

2. 研究方法

対象；本研究では平成7年から年に一度、上越市において募集されている「都市景観デザイン賞」を対象とする。上越市ではこのような制度を設けることで市民の景観に対する関心を高めることを目的としている。この都市景観デザイン賞は「上越市の素敵な景観を紹介してください」という呼びかけのもとに実施されており、対象となる景観が特に限定されておらず、市民の一人一人が好きな景観、残していきたい景観を応募しているという点で非常に興味深いものである。そういった理由から本研究では平成7年から平成11年の5年間分に関して受賞作品だけではなく応募された全ての景観268点を対象とする。

方法；「景観」を人・視点場・対象物の3要素から構成されるものと仮定し、全ての応募景観の写真およびコメントによって、住民に「好ましい」と思われている風景に関して、以下の手順で分析を行う(図1)。

- ① 対象となっている景観の把握
- ② 視点場と対象物の関係
- ③ 対象物と人の印象の関係

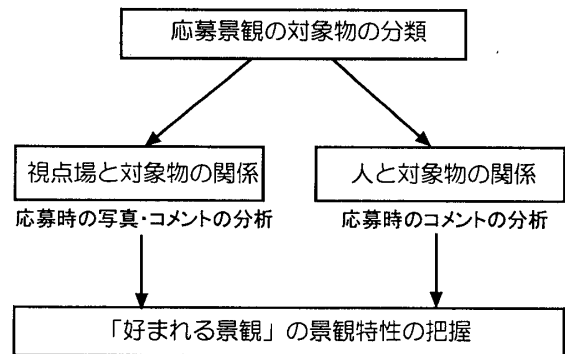


図1 研究のフロー

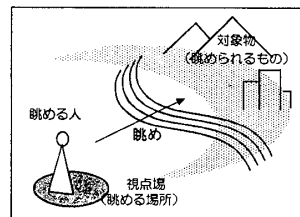


図2 景観の概念

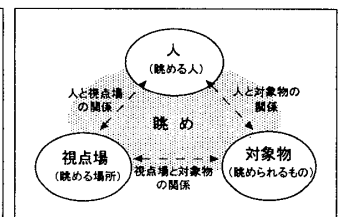


図3 景観構成モデル

3. 研究枠組

本研究では景観を「人が対象を見ることによって生ずる心的な現象である」(図2)という立場から、景観をホロン(holon)、すなわち関係性として考えている。ホロンとはアーサー・ケストラー氏の造語であり、部分と全体の2つの層からなっている。またあらゆるシステムに適用できることから本研究では景観をこのような概念で捉えて行く。ホロンは複雑なネットワークを持つものであるが、これをモデル化し、図3のような景観構成モデルを仮定した。ここでは景観を「人(景観を発見し、認知する媒体)・「視点場(人が対象物を眺める場所)・「対象物(一般的に「景観」と呼ばれているもの)」の3つの要素から構成されているものと考えている。またこの3要素の相互の関係、すなわち人と対象物の関係、対象物と視点場の関係、視点場と人の関係によって景観が成立しているものと仮定する。「見る」人があること、「見られるもの」があること、そしてそれを「見る」場所があることが景観に必要な不可欠な条件である。

4. 応募景観の対象の把握

応募された景観 268 点をその物理的な特性によって、まず「自然景観」・「歴史的景観」・「街の景観」の3つの大項目に分類した。さらにそれぞれの項目を細分化し、自然景観は「自然」、「公園」、「植物」、「農村」、歴史景観は「歴史的建造物」、街の景観は「街」、「道路」、「モニュメント」という8つの小項目に分類された。図4はこれらの細分化された小項目について、それぞれの度数を示したものである。複数の要素が存在する場合には1つの景観に対し、他のカテゴリーで複数回カウントした。度数の高い順に見ていくと、「歴史的建造物」が最も多く64件、ついで「植物」の49件、「自然」の43件となっている。

3つの大項目別に対象物の空間特性をみてみると、「自然景観」は高田公園や青田川、海岸に多く見られる。「歴史的景観」は高田の寺町や雁木、高田城、国分寺、林泉寺周辺に集中している。「街の景観」は高田市街や荒川橋に集中している。

このような対象物の大項目・小項目での整理をふまえ、次に対象物と視点場との関係についてみていく。

5. 視点場と対象物の関係性による景観構造

5-1. 対象物との関係からみた視点場タイプ

個々の景観の視点場を次のように分類し、4で整理した対象物の小項目グループによって、そのような視点場をもつ対象物との関係の特徴を明らかにする。

まず、視点場タイプとしては以下のような4つのタイプがみられた。(図5)

- ① 視点場が明確に特定できるもの
- ② 視点場があいまいなもの
- ③ 視点場が移動性をもつもの
- ④ 視点場そのものが対象物として捉えられているもの

応募された景観全体での各々の視点場タイプの比率はタイプ1；13%、タイプ2；62%、タイプ3；22%、タイプ4；3%であり、視点場があいまいなものが過半数を占めている。これに対してはっきりとした視点場をもつものは全体の1割程度にすぎない。これは上越市において「視点場」という意識はあまりなく、シンボリックな「対象物」に対する意識が非常に強いことを示しているといえる。

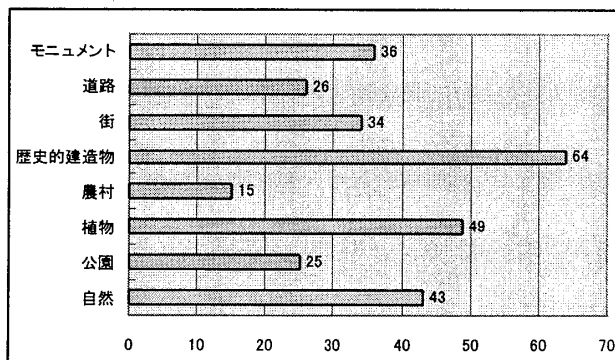


図4 応募景観の対象物の度数

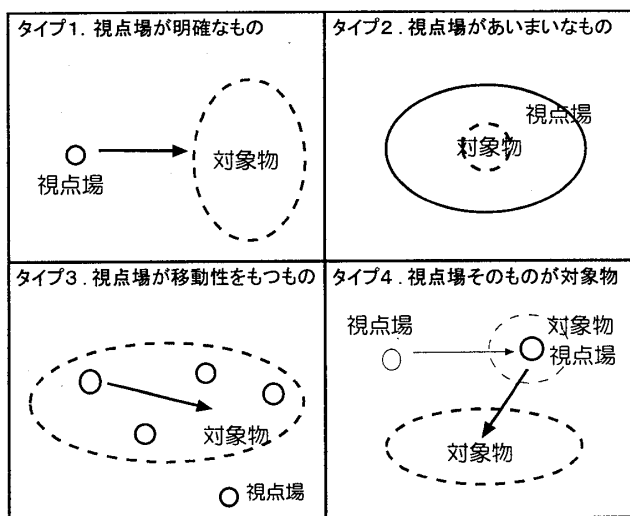


図5 視点場タイプ

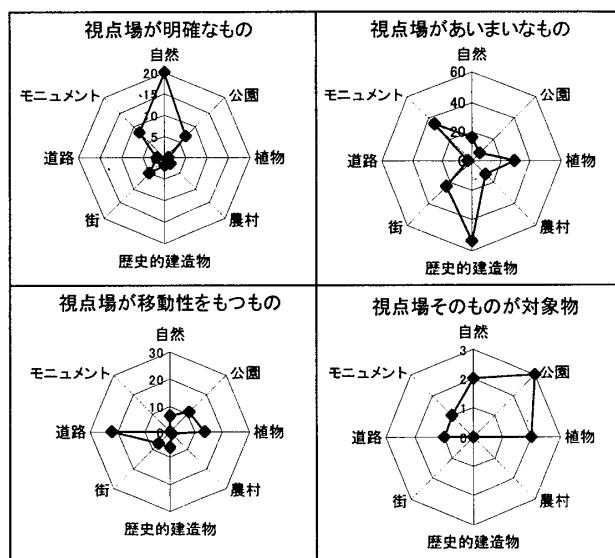


図6 視点場と対象物の関係

5-2. 対象物と視点場の関係性

図6はそれぞれの視点場タイプに関して、対象物との関係性を示したグラフである。

以下に各視点場に対する対象物の関係性を示す。

1) 視点場が明確なもの

視点場が特定の場所として認識されているものである。最も代表的な例が眺望景観であるといえる。具体的な眺望点としては金谷山や春日山、南葉山から高田の街を見る、という山からの眺望、春日山橋や荒川橋などからの橋からの眺望、海岸や浜から海を眺める、というものがある。図6のグラフで示すようにそのほとんどの対象は「自然」となっている。

2) 視点場があいまいなもの

視点場があいまいなもの、特定されないものとしてはモニュメントや歴史的建造物が挙げられる。モニュメントとしては銅像や時計台、歴史的建造物としては高田城などであるが、いずれの場合も「視点場」より「対象物」が強く意識されている。この場合、視点場はある範囲内（対象物の可視領域）であればどこでも良いという点でタイプ1とは異なる関係性をもっている。

3) 視点場が移動性をもつもの

道路や歩道などに代表されるもので、人の移動に伴うシークエンスによって視点場や対象物が常に変化するものである。対象物はタイプ2のように特定されず、その構成要素は複数である場合が多い。あるエリアの中で視点場と対象物が混在している状態で、不規則にその関係が変わり得る。

4) 視点場自体を対象物として捉えているもの

ある視点場から対象を見るとき、その対象自身にさらに視点場が含まれているようなケースである。視点場に対する意識が非常に強い場合ともいえるが、今回はこのようなサンプルが非常に少なかったため、傾向を読み取ることは難しい。

タイプ1、タイプ4は視点場が意識されているおり、タイプ2・タイプ3は視点場があまり意識されないタイプであるといえる。視点場に対する意識が強いタイプ1の対象は主に自然であり、視点場に対する意識が希薄なタイプ2では歴史的建造物やモニュメント、タイプ3には道路景観や公園に集中している。

6. 対象物が人に与える印象—対象物に対する人の見方—

応募景観のコメント（推薦理由）から、応募者が対象物に対して感じた「印象」を抽出し、人の印象と対象物との関係を明らかにする。各コメントに見られる記述から上越市で好まれている景観の印象は大きく分けて次の6つに分類される（表1）。

1) 歴史・伝統；コメントに「歴史を感じる」「戦国の世をしのばせる」というような記述が見られるグループ。対象は全て歴史景観のカテゴリーに属す。具体的な対象としては高田城や林泉寺、五智国分寺、雁木などがある。

2) シンボル性・固有性；「上越市の象徴」「高田ならではの」「直江津らしい」というような記述が見られるグループ。対象は自然・歴史的建造物が多くを占めているが、その一方で荒川橋のようなモニュメンタルなものもこれに該当する。

3) 調和；「自然が美しい」「自然との調和」といったような記述が見られるグループ。主に対象は自然である。具体的には棚田などの田園風景、妙高山、高田公園遊歩道などがあげられる。

4) 快適性；「生活の中に潤いを感じる」「安らげる場所である」「憩いの場」というような記述が見られるグループ。対象としては自然、特に公園などにみられ、対象物そのものが元々ベンチなどの「小道具」を有している場合が多い。

5) 季節感；「季節を感じる」というような記述が見られるグループ。対象としては自然、特に公園などにみられ、対象物そのものが元々ベンチなどの「小道具」を有している場合が多い。

6) 思い；「思いがある」というような記述が見られるグループ。対象としては自然、特に公園などにみられ、対象物そのものが元々ベンチなどの「小道具」を有している場合が多い。

表1 人の印象と対象物との関係の一例

		コメントにみられる記述	対象物
歴史・伝統		歴史を感じる	高田城 雁木
		戦国の世をしのばせる	林泉寺
シンボル性・固有性		上越市の象徴	高田城
		高田らしい・高田ならではの 直江津らしい	雁木 荒川橋
調和		自然が美しい	田園(棚田・はさ木)
		自然との調和	公園・遊歩道
快適性		生活の中に潤いを感じる	植物(桜・アジサイ)
		安らげる場所である	高田公園遊歩道
季節感		憩いの場	公園・広場
		季節感を感じる	河川(青田川) 植物(桜・蓮)
思い	郷愁	昔を思い出す・懐かしい	歩道(砂利道)
		残していきたい	料亭宇喜世
	期待	上越市の発展に期待	荒川橋
			雁木通りプラザ
愛着	いつも見る風景で愛着がある	高田公園のお堀	
	通学するときに通る道	磯名川	

5) 季節感;「季節感を感じる」「風情がある」などの記述が見られるグループである。植物(季節の景物)そのものに対する印象、あるいは特定の場所(高田公園)などの四季の移ろいなどによる印象がある。

6) 想い;「昔を思い出す」「懐かしい」「残していきたい」「上越の未来に期待する」などの記述が見られるグループ。主に昔を懐かしむ「郷愁」と、逆に未来に対しての「期待」、生活の中での「愛着」などがある。

個人的な経験などによるところが大きい。対象物は「歴史・伝統」や「季節感」などのように何かに集約されず、多様性をもつ。

人と対象物の関係からは「歴史・伝統」「シンボル性・固有性」「季節感」は対象物が強く、印象を決定づける大きな要因となっている。これに対し、「調和」「快適性」や「想い」は個人的な経験や嗜好、日頃の生活習慣など主観による印象が大きい。

7. まとめ

7-1. まとめと考察

1) 対象としては自然景観、特に山や河川・植物といった人の手の加わっていない自然と高田城や寺町の寺院などの歴史的な建造物が多くをしめている。その大半は観光資源と一致しており、日常的な景観は少数である。

2) 対象物との関係性から見た視点場タイプとしては4つのタイプに分類され、大きくは視点場が認識されているタイプと視点場があまり認識されていないタイプに分けられる。上越市の特性としては視点場があまり認識されていないタイプが多く、視点場に対する意識が低い。

3) 視点場と対象物の関係から、視点場が明確に特定できるものとしては金谷山等の山からの大きなスケールでの眺望があるだけである。自然景観に対する文化的背景、対象物そのものに対する価値が希薄であるという要因が考えられる。今後の計画に際しては街のなかでの視点場を多く意識し、視点場そのものに対する認識を深めていくことが重要である。

4) 人と対象物の関係からは「歴史・伝統」「シンボル性・固有性」は対象物が強く、印象を決定づける要因となっている。これに対し、「快適性」「想い」は個人的な経験など主観による印象が大きい。このように対象物が人に

与える印象には対象物による印象と人による印象の両方がある。

7-2. 本研究で明らかになった問題点と今後の課題

本研究では上越市民に「好まれる景観」を把握したが、はたしてその結果が今後のまちづくりの上でどのように生かしていけるのかという観点から考察を行う。前項での結果から次のような2つの大きな問題点が浮かび上がってきた。

1) 上越市民の景観の見方そのものの問題点

本研究の分析結果によれば、上越市民が好んでいる景観特性の特徴として、高田城や荒川橋などの対象物が強く意識されているタイプが多いということがある。これらはいわゆる観光パンフレットにあがっているようなものと合致しているといえる。もちろんそのような万人に好まれるという景観も大事であるが、その一方で暮らしの視点・日常的な視点でまちを見ていくべき必要がある。日常的な風景を大切にしていくことこそがまちづくりの原点なのではないだろうか。

2) 都市景観デザイン賞の制度上・運営上の問題点

前述のような日常的な風景が応募作品に少ないのは、1) のような問題点だけでなく、現在の都市景観デザイン賞の応募の仕方に問題があるとも考えられる。現在の都市景観デザイン賞では部門分けがなされておらず、そのため高田城などの観光資源的なものと日常的な風景が同様に扱われている。実際に応募する人は当然のことながら賞をもらいたいという思いが強くそのため観光資源的なものに偏る傾向が一層強くなったともいえる。

参考文献

- 1) アーサー・ケストラー著、田中 三彦・吉岡 佳子訳; 「ホロン革命」、工作舎、1983年
- 2) 中村良夫著; 「風景学入門」、中央公論社、1982年
- 3) オギュスタン・ベルク著・篠田勝英訳; 「日本の風景・西欧の景観」、講談社、1990年

* 1) 新潟大学工学部建設学科 教授・工学博士

* 2) 新潟大学工学部建設学科 講師・博士(工学)

* 3) 新潟大学大学院自然科学研究科 大学院生